

聖書に親しむ

2026年 聖書週間（11月15～22日）

テーマ：もはや戦うことを学ばない（イザヤ 2・4）

2026.11.15

カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10

TEL03-5632-4445 FAX03-5632-4465

郵便振替 00130-6-36546(宗)カトリック中央協議会一般会計口

巻頭言

平和を学ぶ巡礼の旅

聖ザベリオ宣教会司祭
スック・G・パオロ

毎日のように、世界のどこかで戦争や武力衝突のニュースが伝えられています。遠い国の出来事のように思えても、その影響は私たちの生活にも及びます。人々の間には不信や対立が広がり、社会には分断の空気が漂います。平和を願わない人はいないでしょう。しかし、その平和をどこで、どのように学ばばよいのでしょうか。

預言者イザヤは、主の山に向かって歩む人々の姿を描きます。人々は「主の道を教えていただこう。その道を歩もう」と言い、神のもとに集まります。そして、その幻の頂点に響くのが、「もはや戦うことを学ばない」ということばです。戦争がなくなる未来とは、単に武器がなくなる世界ではありません。人間が生き方そのものを学び直す世界です。人々は争いの道ではなく、神の示す道を学ぶようになるのです。

この預言は、現代に生きる私たちにも大切な問いを投げかけます。私たちは日々、何を学んでいるのでしょうか。効率よく生きること、競争に勝つこと、自分を守ることは学んでいても、平和に生きingことを学ぶ機会は案外少ないのかもしれませんが。気づかないうちに、人を疑うことや排除すること、対立することを学んでしまうことさえあります。

だからこそ、私たちは聖書に立ち返る必要があります。聖書は過去の出来事を記した歴史書であるだけではありません。神とともに生きる道を学ぶ場です。そこには、神の平和を求めながら歩んだ多くの人々の姿が記されています。預言者たちは正義を語り、詩編の作者たちは祈りを歌い、人々は失敗と回心を繰り返しながら神の導きを求めました。その歩みを通して、私たちもまた生き方を学ぶのです。

イザヤの預言は、新約聖書の中でさらに深い響きをもって私たちに語りかけます。「わたしのもとに来なさい」「わたしに学びなさい」。イエスが学ばせようとするのは、権力を握る方法でも、相手を打ち負かす技術でもありません。「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしに学びなさい」と語られます。平和は力によって生まれるものではなく、柔和な心から育まれることを、主ご自身が教えてくださるのです。

ここに、イザヤのことばとイエスの招きを結ぶ大切な鍵があります。それは「学ぶ」という動詞です。イザヤは、人々が「もはや戦うことを学ばない」未来を語りました。イエスは「わたしに学びなさい」と招かれました。平和とは単なる願望ではなく、弟子として学び続ける道なのです。イザヤの預言は、「わたしに学びなさい」という主イエスの招きを通して、今日の私たちの中で実現し始めます。イエスの生き方を身につけていくところに、平和への歩みが始まります。

今年の聖書週間のテーマは、戦争や暴力がなお世界を覆う時代にあって、いっそう重い意味を持っています。私たちは大きな国際問題をすぐに解決することはできません。しかし、神のことばに学ぶことはできます。家庭の中で、職場で、地域社会で、ゆるしと和解を選び取ることはできます。その小さな歩みが、神の望まれる平和への道につながっていくのです。

聖書を開くとき、私たちは一冊の書物を読むだけではありません。平和を学ぶ巡礼の旅に加わるのです。主の山を目指して歩んだ人々とともに、イエスの弟子たちとともに、そして今日の教会とともに、神の平和を学び続けたいと思います。

「もはや戦うことを学ばない」。

この預言のことばが遠い未来の夢ではなく、聖書に親しむ私たち一人ひとりの歩みの中で、少しずつ現実となっていきますように。

「もはや戦うことを学ばない」

大分教区司祭 山下 敦

戦争が終わりません。人が存在し始めて今日に至るまでどれほどの月日が過ぎたかわかりませんが、人類は、いまだにこの愚かなことをやめるでたてを知りません。

今年の聖書週間の聖句は、イザヤ書2章4節の言葉です。ほぼ同様の表現がミカ書4章3節にもあります。この二つの預言書は、ともに、紀元前8世紀のユダ王国を舞台としており、それはいわゆる戦乱の世、イスラエル全体が敵国に囲まれ戦争が茶飯事だった時代、同時に、国内では富の集中、土地の収奪、司法の腐敗など社会的不正が広がっていた時代です。そのような中、イザヤとミカは「戦うことを学ばない」預言を伝えたのです。「終わりの日に」とありますから、将来、いつか戦争が終わって平和が実現する日が来るということですが、それから3千年近くたった今も戦争は終わっていません。

ここ数年の大きな戦争（たとえばロシア・ウクライナやパレスチナ近隣）については、確かに多くの人が反対の声をあげています。世界的にも、又、日本においても、意見としては無論、大多数が反対で戦争をやめて欲しいと思っています。

しかし、戦争を「争い」や「口論」などの言葉に置き換えてみると、どうでしょう。わたしたちの周り、社会にはそのような現象があふれています。気に入らないことがあったらその相手をすぐ訴えたり、ネット上の書き込み等で特定の人をつるし上げたり、嫌いな人を暴力的な言葉でこき下ろすなど、この手の例はきりがありません。これらの現象は、わたしたち自身が、今、戦わないことを学ぶ必要があることを示しています。突き詰めて考えていくと、日常生活における不平不満をはじめ、他者への悪口、中傷、非難、暴力的な言葉や態度、こういったわたしたち自身の言動こそが、戦争の発端でもあることにたどり着くはずで

「戦うことを学ばない」とは、戦争をしないことだけを意味するものではありません。戦争をしないことは大前提ですが、この聖句は、むしろ、その原因となっているわたしたちの日常的な罪ともっと真剣に戦わなければならないことを教えています。現代社会では、人々が皆不満を持っており、多くの愚痴が聞かれます。教会も然りです。物事がうまくいかない中で、司祭や修道者も愚痴ばかりこぼしています。教会も社会も、不平不満と愚痴で溢れているのです。そんな中、物理的に起こっている戦争について反論するだけで、戦争さえなければ平和だと思い込んでいるのは愚かなことです。

教皇レオ十四世も今年の被造物を大切にする世界祈願日メッセージで以下のように述べています。「戦争は、ゆがんだ欲望と、人間に与えられた自由と力の濫用に根を張るもの……です。……事実、世界で目にする不調和——暴力、不正義、環境悪化——は、制度や構造の不備に起因するだけのものではありません。それらは『人間の心に根ざす、あのより根源的な不均衡と結びついている』（『現代世界憲章』10）のです。……戦争の傷と大地の荒廃は、人間の心の状態と深く結びついています。人間を苦しめる争いは、内なる不和や分裂が、さまざまなしかたで外に現れ出たものなのです。心が道を誤れば、人とかかわりも病み、わたしたちの築いている制度の数々にもその乱れが映し出されるようになります。……ですから平和な社会を築くには、諸制度を改めるだけではなく、わたしたち一人ひとりの心も新たにしなければなりません」

今、求められているのは回心です。「心の底からの回心……神への忠実さを深めること、互いに愛し合うこと、被造物というたまものを尊ぶことに結実する回心」と教皇は言います。

個人的には、真の平和は、日常生活における隣の人との普通の健全な関係から始まると思っています。

神のみことばを深める

——聖書という楽譜を読み、隣人とともに演奏して生きること

サレジオ修道会司祭 阿部仲麻呂

聖書は楽譜にたとえられましょう。それゆえ、聖書を読んでから、いかに生きるのか、が私たちには問われています。神のみことばを深めることは、まさに聖書という楽譜を読み、自分らしく演奏して生きることなのでしょう。想い深く、あたたかく、美しく。

しかも仲間とともに演奏するとともに、その合奏による調和の音色を聴いた周囲の人々をも新たな奏者として招くことで地球規模での兄弟姉妹同士の聖家族としての壮大な演奏を実現させて神を讃美することも欠かせません。さらに故人たちとも心を合わせて。

名曲の楽譜だけがあっても何も実感できません。しかし楽譜を読んでから演奏する努力家が少しいるだけで、数多くの人々が名曲を聴くことができます。しかも演奏者が十人いれば十通りの演奏の豊かな流れが生じます。こうして一つの楽譜でも演奏者によって多様な響きが奏でられて聴く者の心をふるわせます。皆が安心して、ゆったりとしあわせを実感できます。心をこめた演奏は相手に対する愛情深い贈りものとなります。

聖書も同じです。聖書の内容を理解して生きる者がいれば、その努力家の歩みをとおして神のみことばはあらゆる相手の心の底に幅広く届いて豊かな実を結びます。しかも聖書という楽譜をていねいに読んでから社会生活をとおして真剣に生きる者同士が補い合ってチームで活躍すれば、地域社会に対して教会共同体全体で明るい交響曲を響かせることもできるようになります。聖書に描き込まれた神の愛情深い呼びかけを学びつつ、社会での愛情深い奉仕という演奏をつづけることが、洗礼を受けたキリスト者ひとり一人の使命であるとともに、世界全体の教会共同体というオーケストラによる挑戦でもあるわけです。

その際に、隣人つまり隣にいる仲間の奏でる音をじゅうぶんに聴き取りながら自分の音を調整すれば、全体の調和が見事に果たされます。こうして各自の努力と才能が活かされると同時にチーム全体の団結力（シンダリティー）も活かされると、まさに最強の交響曲が仕上が

ります。魅力あふれる悦びの音色の重なりはあらゆる人を巻き込んで和ませ、それまではまったく縁もゆかりもなかった者たちもおもわず隣人の輪のなかで息を吹き返して活き活きと立ち上がって気前よく奉仕し始めることになります。たがいに仕え合うことで、おのずと「しあわせ」（慈愛深い神による支えと配慮）がみなぎります。

教皇フランシスコは、聖霊こそがキリスト者の教会共同体という壮大なオーケストラの指揮者であると、さまざまな講演のなかで頻繁に述べました。愛情深いいのちのいぶきとしての聖霊のおだやかで激しい情熱に満たされた後押しに支えられて、私たちもあらゆるしがらみから解放されて伸びやかに御父である神と御子イエス・キリストとの一致した協力関係にならいながら新鮮な演奏の日々を積み重ねてゆきましょう。三位一体の神の協力関係を地上で反映する教会共同体の心あたたまる演奏を聴く数多くの方々が安らぎを実感して笑顔になるように。さあ、今日も、祝福のチャーミングな音色を響かせましょう。



良書のすすめと読み方

①聖書 原文校訂による口語訳 FB-B6 (フランシスコ会聖書研究所訳注) 2013年 サンパウロ 5,100円+税

世界広しと言えど、我が国ほど聖書の邦訳が刊行されている国はないのではないのでしょうか。ざっと頭に浮かぶものだけで七、八冊あります。新約聖書だけに限定すれば改訂版、個人訳を含めると三〇冊近くになるでしょう。お気に入りの聖書を大切にするのも素晴らしいことですが、他の翻訳と読み比べてみてはいかがでしょう。新しい発見があるかも。フランシスコ会聖書研究所訳聖書は、一九五六年の研究所設立から、一九五八年の『創世記』を皮切りに二〇〇二年の『エレミヤ書』に至るまで、四六年をかけて三七分冊が一冊の合本になったものです。その特徴は、カトリック教会の伝統に沿って、旧約聖書統編(第二正典)をその文学類型に応じて旧約聖書本篇のうちに配置しているところにあります。また、本文に注が付されています。分冊での分量には及びませんが、要所要所に、読者としてはここで一言説明が欲しいと思う箇所に絶妙なタイミングで注が施されていると好評です。



②フランシスコとともに祈る フランシスコ会日本管区編訳 2026年 ドン・ボスコ社 600円+税

「主が教会に対する信仰を与えてくださいましたので、わたしたちは簡潔に次のように祈りました……。」とアシジの聖フランシスコは『遺言』に記しています。彼の祈りは簡潔なものでした。短いことばを繰り返しながら祈っていたのでしょう。その祈りの数々は聖書のみことばの組み合わせから成り立っています。まだ紙すらなかった13世紀のヨーロッパにあって、どのようにして神のみことばを記憶し、ここに刻み、自分のことばとして語れるようになったのでしょうか。父なる神について90以上の表現を使っている聖フランシスコは、「誰もあなたのことを語ることはできないのです」と自らの小ささと罪深さを認めます。それでもなお神を讃えないわけにはいかない、そんな燃える想いを持ち続けていました。そうした聖フランシスコを伝記は「祈りの人」と証言しています。この「フランシスコとともに祈る」という小さな本は、たくさんある祈りから厳選して編まれたものです。「第二のキリスト」と呼ばれたアシジの聖人とともに神を賛美しましょう。



③アシジの聖フランシスコの「太陽の賛歌」と「平和の祈り」 フランシスコ会日本管区 監修 2026年 教友社 2,700円+税

本書には、アシジの聖フランシスコの「太陽の賛歌」と「平和の祈り」に関する七つの論文が収録されています。2025年に出版された総長書簡「和解の賛歌」をはじめ、第一部には「太陽の賛歌」についての故・カリシモ・ロンデロ師、伊能哲大師、小高毅師、小西広志師の論文が、第二部には「平和の祈り」についての故・堀田雄康師、木村晶子修道女の論文が収められています。厳選されたこれらの論考のどれもが、聖フランシスコがこの賛歌に込めた意味を明らかにしつつ、21世紀に生きる私たちに問いかけているものが何であるのかを示してくれるはずです。三位一体の神を讃えるこの二つの賛歌を、私たちが祈りとして唱えることによって、ますます心を神へと向けることができるようになるでしょう。聖フランシスコの霊性を知るためにも最適の一冊です。



◆編集後記◆

今年は、新設された福音宣教司教委員会の「聖書・教理部門」で、このリーフレットを担当しました。求められている“平和”のテーマについて、みことばが多くの糧を提供してくれることに信頼しています。平和は神のたまものであり、神ご自身の臨在の結果です。しかし、わたしたち自身も、神の恵みを祈り求め、神ご自身を受け入れるよう、自身を整え、回心していかなければなりません。それもまた神の恵みによるものですが……。聖フランシスコ年の今年、神のみことばを生きる真の平和の人となれますよう心より願います。平和の元后である聖母のお取り次ぎのうちに。

◆献金をお願い◆

この「聖書に親しむ」は無料で配布しておりますが、諸経費を含め聖書に関する活動のためにご寄付いただければ幸いです。その際は、下記へご送金くださいますようお願いいたします。

振込先： 郵便振替 00130-6-36546 (宗)カトリック中央協議会一般会計口